

十三 世界のブランド「IMARRI」

—海を渡った有田の磁器—



かつての「伊万里」の積み出し港（伊万里市伊萬里津大橋）

自動車、VTR、鉄鋼、IC、これらは現在、日本が海外に輸出している代表的な工業製品です。日本の製品は優秀で世界中の人々に愛用されています。ところで、今から三百五十年ほど前、日本が鎖国をしていた江戸時代にも現在の自動車やVTRと同じように日本から海外に大量に輸出された「ある製品」がありました。それは、遠く海を越え東南アジア、アフリカ、ヨーロッパの国々に輸出され貴重品として珍重されました。その「ある製品」とはいったい何でしょう？……それは「伊万里」と呼ばれていた磁器のことです。

日本で磁器が本格的に焼かれるようになったのは、豊臣秀吉の朝鮮出兵後の有田（西松浦郡有田町）においてだと言われています。その後、有田周辺で焼かれた磁器は伊万里の港から積み出されたことから「伊万里」と呼ばれました。では、どうして「伊万里」が海外に輸出されるようになったのでしょうか。

これには、当時の中国とオランダが関係しています。一六一〇年ころ（江戸時代の初め）まで、世界の磁器生産は中国の独占状態でした。それは、今でも磁器のことを英語で「china」と呼ぶことからもうかがえます。中国からヨーロッパへの磁器の販売ルートを握っていたのはオランダの連合東インド会社（頭文

字をとってV・O・Cをトレードマークとしていた)でした。ところが、一七世紀半ばにV・O・Cにとって困ったことがおきました。それは中国からの磁器輸出が途絶えたことです。当時、中国では明王朝が衰え、国中が動乱の状態になりました。そして、磁器生産が停止し、その後、新しく興った満州族の清王朝は海上貿易を禁止しました。これが磁器輸出が途絶えた原因です。そこでV・O・Cは中国磁器のピンチヒッターを探すこととなりました。それが、わが日本の「伊万里」でした。当時の「伊万里」は、まだ中国磁器のように薄い生地ではなく、また少しくすんだ白色でしたが、技術はしだいに高まりつつありました。

記録によると一六四〇年代から「伊万里」の海外輸出が始まり、ヨーロッパ向けの輸出は一六五〇年代に始まっているようです。輸出の初期段階では、病院で使う薬壺や薬瓶が大量にバタビア(現在インドネシアのジャカルタ、当時のオランダのアジア植民地の中心地の一つ)の病院用に輸出されています。その後、「伊万里」の輸出量は増加するとともに、V・O・Cからの絵図や木型の見本による注文を受けて、いろいろな種類の「伊万里」が生産・輸出されています。例えば一六五九年に輸出された磁器五万六千七百個の内訳は茶碗、鉢、皿、バター皿、薬壺、卓上塩・芥子入れ、インク壺、ブドウ酒用ジョッキ、コーヒー碗などで実にさまざまなものに及ん

「伊万里」が運ばれた海の道



連合東インド会社のマークがある「伊万里」の皿
染付芙蓉手鳳凰文大皿 (九州陶磁文化館蔵)





ドイツ・ベルリンのシャルロッテンブルグ宮殿「磁器の間」を再現したもの（写真提供：ハウステンボス様）

でいました。

このように「伊万里」は鎖国の時代、海外への唯一の窓口であった長崎の出島からV・O・Cによつて大量に輸出され、十七世紀後半から十八世紀後半にかけて、輸出個数は記録されているだけで約三百七十万个以上にのぼるそうです。これらの「伊万里」の輸出先はオランダ本国、アラビアのモカ、インドなどです。なお、オランダ本国に輸出された磁器はオランダからさらにヨーロッパ各国に輸出されていました。

上の写真を見てください。なんと豪華な部屋でしょう。これはドイツのベルリンにあるシャルロッテンブルグ宮殿の「磁器の間」です。ヨーロッパの国王や貴族たちは黄金や寶石とともに、こぞつて中国磁器や「伊万里」を集め部屋に飾っていました。ベルサイユ宮殿を造つたフランスのルイ十四世やイギリスのメアリ二世も磁器の収集家でした。当時の磁器ブームの様子は、次の話からもよくわかります。

ザクセン（今のドイツ東部）のオウグスト強王は当時プロシア国王が所有していた多量の中国磁器の花瓶や鉢、皿を何とかして手に入れたと考えていました。しかし、当時財政難であったため、お金で買うことはできません。そこで彼は自国の竜騎兵六百人と引き換えにプロシアから百二十七個の花瓶を手に入れました。また、彼はどうしても中国磁器や「伊万里」と同じものを自分の国でも作らせたいと思っていました。

その理由は彼自身が磁器をほしいことと、自国の財政を磁器の生産で豊かにすることにありました。そこで錬金術師ベツトガーに命じて磁器の製法を研究させ、ついに一七一〇年、ヨーロッパ初の磁器生産に成功します。それは現在、マイセン焼として受け継がれ世界的に有名です。

なお「伊万里」の「古伊万里様式」や「柿右衛門様式」の図案はヨーロッパ各地で人気があり、フランスのシャンテイー窯、イギリスのチェルシー窯、ボウ窯、オランダのデルフト窯で盛んに図案として磁器や陶器に描かれました。このように、わが佐賀県の有田で焼かれ輸出された磁器は、ヨーロッパの窯業に大きな影響を与えました。

しかし、絶大な人気を誇った「伊万里」も、中国磁器生産の復活や世界貿易の主導権がオランダからイギリスに移り、オランダが扱っていた「伊万里」が独占していた磁器市場を、イギリスが扱う中国磁器に奪われたため、一八世紀後半には世界の表舞台から消えていくこととなります。しかし、海外輸出が減少した一方で、その減少分が国内向けにまわり、ようやく江戸時代の庶民にまで磁器が普及していくこととなります。その後、幕末から明治にかけて、パリやウィーン万国博覧会に「伊万里」は出品され、好評を得ています。そして、再び「伊万里」は海外へ輸出されるようになり、現在に至っています。